
ブレイズ クローズ

激突王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイズ クローズ

【Nコード】

N7989R

【作者名】

激突王

【あらすじ】

普通の10歳の少年ユウタと友達は、なぞの少女によりユウタとその友達が飛ばされしつまた！

そこは、夢で見た世界「クローズ ワールド」

しかしそこは、闇の軍団「カオスダーク」により侵略が進んでいた。ユウタは、友達とはぐれてしまい彼は記憶喪失しまった！

敵の攻撃に巻き込んでしまったところ。

彼を助けた二人、ミキとジミー

ユウタの運命は・・・

第零話（前書き）

初投稿なのでよろしく

第零話

それは、ある城と近くにある町の出来事だった・・・
そこは、戦火に燃えていた。城の兵や町の半分以上の人が殺されて
いた。

敵は、人間型殺人ロボット「ザク」や「ジン」で襲い掛かる。
もはや逃げるの難しい中必死に逃げる二人の影が見えた。
見た感じ城の皇女とまだ若い10歳くらいの少女だ。

「いい、これからあなたを逃がします。」

「やだ！私は、お母さんと一緒にいたい！」

「いいから！」

その瞬間遠くのほうから爆発の音が聞こえた。

皇女は、片手をひろげたとき少女の後ろに空間がでてきた。

「！！！」

少女の体がふつと浮かんだ皇女の反対の手で押したからである。

「お母さん！！！」

少女は泣きながらよんだ。

「みじかつかたけど、あなたと過ごせた時間は、楽しかったよ
だから・・・」

「お母さん！！！」

「皇女はなにを言ったのか聞こえなかった。

ひろげてた手がだんだん閉じそして空間が閉じてしまった。

そして皇女は力をすべて使っていまいその場からたおれてしまった・

第零話（後書き）

これからよろしく！

第一話 少年（前書き）

さあ！いこうか！

第一話 少年

(・・・なんなんだ？今の夢は・・・？)

「おい！ユウタ起きろ！いつまで寝ているんだ！」

「はー！」

と、ユウタと言われた少年が起きた。彼の前に、一人の少年が立っていた。

「よう。おはようクロエ。」

クロエは、ユウタの友達、いつからなのかは、別にどうでもいいことだ。

「おはようじゃないだろう！もう放課後だぞ！いつまで机で寝ているんだよ。」

たしかに教室の時計を見たら帰宅時間の三時がまわっていた。

ここは、私立第三東京大付属小学校、俺は、いまはまだ普通の10歳の四年生

「まじかよ！！なんで起こさなかったんだよ！」

「さつきからやっていたよ！だけどぜんぜん起きないし。」

クロエは、飽きた顔で答えた。

だけど次に見たときには、ユウタの姿がなかった。

「なんでこういうときは早いんだよ。」

「クロエ早く！」

ユウタは、もう外にいた。

「あら？ユウタ君？まだいたの？」

と、ユウタの後ろから声がした。

「ああ、なるみに、しゅんちゃん！」

この二人も彼の友達しゅんちゃんは、しゅんすけのあだ名

「なにがあだ名なんだ」

「へ？きこえてた？」

「まるきこえた！」

「あれ……？」

と、ユウタは、照れながら頭をかいた。

「やっと追いついた」

クロエは、汗だらだらながしていた。

「おつかれさまクロエ君」

なるみは、笑顔で返した。

「もうだめ……」

「だらしないうろエ」

「お前のせいだろうが……！」

「で、今日は、どんな夢をみたの？」

「今回はな……」

ユウタ夢の内容を、話した。

「あはは……！！なんだよその夢は、城とは、おとぎ話じゃないんだから笑える！」

しゅんすけとクロエは、腹を抱えたまま笑っていた。

「それで結局その少女は、どうなったの？」

「わからない……」

その寸前……

（見つけた……やっとあなたに……）

「……？」

ユウタは、後ろを振り向いたがだれもいなかった。

「どうしたの？」

「いやなんでも」

しかし、前に振り戻ったとき一人の少女がたっていた。

「だれ？あんな」

少女は、無視したのか、右手をおもつきり開いた瞬間ユウタたちの後ろに空間が開いた！

「……！！」（あれは、どつかで……）

「おい！なんだよこれ！」

「俺が知るか！」

「もう無理」

ユウタたちは、空間にのみこまれてしまった。
そして、空間がきえてしまった。

「これでいいのね・・・」

なぞの少女は、疲れたのかその場から倒れてしまった。
そこに一人の少女がやってきて

「ねえ、きみ大丈夫！」

しかしそれに返すことは、一言もなかった。
ユウタたちは、どこにいつてしまったんだ？

第一話 少年（後書き）

またな！

第二話 少年2（前書き）

第二話です

第二話 少年2

そのころユウタ達は、まだ空間の中に飛ばされていた。

「いつまで飛ばされるんだ！」と、クロエは聞いた。

「そんなの俺が知るか！」ユウタは、それを返した。

「そんなこと言っている場合じゃないでしょ！」なるみは、二人の会話を止めた。

「でもこれはいったい・・・」しゅんすけは三人に聞いた。

「・・・・・・・・・・」みんなは、黙り込んだ。

そして四人の中から一人だんだん離れていつている人がいたユウタだった。

「ユウタ！！」クロエは呼んだが聞こえなかった。

「クロエ！みんな！」

ユウタもおなじ事を言っていたがみんなには、聞こえなかった。彼は、みんなから離れてしまった。もう見えなくなるほど。

「なんだよ・・・この先どうなるんだよ・・・」

「まさかここで一人ぼっちかよ・・・」

その瞬間かかれの右腕になにか取り付けられていた。

「なんだこれ??」

そしてその先に、光が見えてきた。

「出口か!!」

ユウタは、光に向かって飛び出した。しかし、その先は・・・

「なんだよこれは・・・」

見た光景は、森が燃えていた。

「どこだよここは？」

ドン！！と爆発な音が聞こえた。

「なんだ!!」

その先になんか来た。

「ロボット??・・・・・・・・!!」

彼は、あれをどこかで見たことがあった。

ロボットの視界が彼を見た。そして攻撃し始めてきた。

「わあ！！」

彼は、何とか逃げよけていた。しかしそれは、長くは持たなかった。

「もうだめなのか・・・」

その瞬間ロボットが５機破壊された。

その後ろに二人の影が見えた。一人は、長い髪をして二つの短剣を持っていた少女に

長い槍を持つ少女より背が低い少年、どちらも変わったアーマーを着けていた。

「君、大丈夫？」少女が聞いてきた。

「姉ちゃんまた来るよ、しかもさっきより強いよ」と、二人の視界が向いた

「ザクのつぎは、ジンですか・・・おもしろい」

ジンは、足に付けられていたミサイルを発射した

「ええ！！」

そして三人の近くで爆発した

「これは、さすがにきつियो！」

「そうね、でもせめてこの子だけは・・・？」少女は、彼を見た。

「ねえ、君しつかり！」

少女は彼に言ったが聞こえなかった。

「俺は、どうしたらいいんだ・・・このまま死ぬのか俺・・・やだ、死ぬのはもつとやだ。」

「ねえ！君！！」

「俺は、死ぬもんかああ！！！！」

そのとき彼についていた物が光り始めた

「姉ちゃんあれ、僕達と同じやつだよ」

彼の周りに光の渦が回っていた。と、少女は

「なにあれ、すごい・・・」

そして彼に回っていた光が散り舞ったとき彼の姿が変わった

アーマーは、二人と同じだが、武器は違った。長い長剣だが刃のところがギザギザでまるで

獲物を切り裂くような刀だった

「なんだよ！あの刀でかいよ！！」

彼は、武器を天に向けたそして刀は、電気をまとい刀を振り切った

「サンダーブレイド」

振り切った雷はジンの束に命中し巨大な爆発をした。

「彼はいつたい何なのよ……いつたい……」

次回予告

なんとか敵を倒した彼は、突然倒れてしまった！

二人に助けてもらい名を聞かれたが、彼は記憶喪失に！

次回ブレイズ クローズ第三話「記憶喪失」

よろしく！

第二話 少年2（後書き）

次回もまた！！

第三話 記憶喪失（前書き）

さあ！いこうか！！

第三話 記憶喪失

なんとか戦いも終わり森の火事も消化し終わった。

「ねえ君、いったい何者なの？」少女は彼に話しかけた。^{ユウタ}

「俺？俺は………」

彼はなぜか突然倒れてしまった

「ねえ！どうしたの君！ねえ！！」

「お姉ちゃん、とりやえず病院に」

「ミキーーーーー」とミキと呼ばれた少女は振り向いた

「あずさ！どうしたの？？」あずさと呼ばれた少女はミキのところについた

「それはこっち、さっきミキ達のほうにもの凄い雷が振ったから心配で」

「ありがとう、あずさでも私たちは大丈夫だから

それにあの雷は……」ミキの視線は、彼の方に向いた

「誰、その子？」

「分からない、空から降ってきたし、いったい何者かと分かっているし」

「お姉ちゃん！」

「ああ！とりやえず病院に！」

「私も行く！ちよつとは、気になるからその子」

「それじゃ行こう」三人は、彼を背負い走り出した。

そこは暗い世界だったそこに一つデッカイ要塞があった

「いかなさいます？」背の高いマントで姿を隠していた

「お前ならどうする？メビューサ？」とユウタの三つ上の歳の少年が言った

「私なら即殺します、カオス様」

「コングマンは」

「俺もです」

「ならバンパイアお前の好きにやれ」

「わかりました」バンパイアは、その場から姿を消した

「なんで奴^{バンパイア}なんですか？私なら」

「そう焦るな、すぐに殺してもつまらないし」

「分かりました」

「奴らもまだ目覚めないし、これから楽しいことも始まるしな」

一つのスクリーンが映されたのは、三つにカプセルに一人ずつ入っていた

少女一人に二人の少年が入っていた・・・

（なんだここ・・・??）

彼が見ていたのは周りが真っ暗だった

（誰そこにいるのは）

彼の目の前には三人の後姿が見えていたがだんだん離れていつている

（待ってよ!!）

「ねええ!!」しかしそこはさっきのとは別の空気だった

「あら、起きたの思ってたより早かったね!」ミキは笑顔で彼を見た

「君は確か森で・・・」

「ええそうよ」

「あらら、もう起きたの」一人の少年とあずさが入った

「君たちは??」

「ああ!自己紹介がまだだったね 私はミキ、そしてこの子は私の弟のジミ

この人は友達にあずさ、よろしくね!そして君の名前は??」

「俺?・・・俺は・・・分からない・・・」

彼は黙り込んだ

「ええ!まさか記憶喪失!!」とミキは驚いた

「お姉ちゃんうるさいよ!ここは病室なんだから」

「ごめんごめん、だけど困ったねえ名前が分からないじゃ・・・歳は

「？」

「10歳」

「10歳！私とあずさと一緒にじゃない！！」

「それでどうするの？」あずさはミキに問いかけた

「記憶がないのならとりやえず名前だね……………」

そうだ「ソラ」なんてよくない「ミキは彼に聞いた

「別にいいけど分からないし」

「なら「ソラ」で決定！！」

「なんでソラなの？」ジミは聞いた

「なんでって空から落ちてきたから」

「それで……………」みんな息そろっていった

（ソラか……………俺はいつたい何者なんだろ……………なんでここに来てしまったんだろう??）

それさい分かれば……………）

第三話 記憶喪失（後書き）

次回もまたね!!!

第四話 強敵その名はバンパイヤ（前書き）

やっと出てきました強敵

第四話 強敵その名はバンパイヤ

「なあミキさん」

ソラはミキに話しかけた

「ミキでいいよ」

「それじゃミキ、あいつらはいったい何者なんだ？」

「それなら私が話すよ」

と、あずさが話しに入ってきた。

「あいつらは「カオスダーク」と言う闇の組織、ここ一ヶ月前からあいつらの襲撃が多くなってきたの。」

「なぜ、あずさが……」

そこにミキが言った

「あずさの家族は、あいつらに……殺されたの……」

「えっ……」

ソラは、声も出なかった。ミキは、まだ続いた。

「私達は王国の近くの下町に住んでいたの……だけど、突然あいつらに襲われたのよ！」

私達は、何とか生き延びたけど、お父さんやお母さんは……」

ミキは涙を流した。ソラは、手を握り締めた

「そんなの許すかよ……」

「え……？」

「そんな何人もの人を殺して笑っていられる奴らは……俺が全て倒す……！」

外で爆発の騒ぎが突然出てきた

「行くか、みんな！」四人は病室を出て行った

爆発の中にひとつの影が飛び出してきた。それは、さっきマントで姿を隠してた奴だった。

「あいつらは確かに、ここに來ているはず……」

「おい！てめえ！！」

奴が振り向くとソラ達の姿が現れた。

「ほう。君たちから来てくれるなんて探すはめが無くなったよ」

「テムエらがやっている事は一生許されない！！だからこの俺がお前ら全て倒す！！！」

姿を隠していたマントを広げたその姿はまさに（吸血鬼）のようだった

「自己紹介がまだでしたね、わが名はバンパイア、いごよろしく」

「名前まで吸血鬼かよ、まあいい！いくよ皆！」

ソラが言くと三人はそれを返した

腕についてるトランサーが光り始め四人の姿が変わった

「それじゃ始めますか、命の覚悟は」

「そんなのどうでもいい！！いくぞ！！！」

ソラ ミキ ジーミはバンパイアにいきよいた、あずさは逆に距離を離れた

「私の戦い方があるのよ！」あずさは長距離用スナイパーをトランサーから取り出した

「ほう狙撃者がいるのですかいいですね。おもしろい」

バンパイア余裕にソラ達の攻撃を避けながらあずさの方を見ていた
「こいついい加減に当たれ！」ジーミのいくつもの突きをよけ姿を消した

「いない、どこに行った」

「ここです」「ええ・・・？」

後ろに振り向くとそこにはバンパイアの姿があった

「終わりです」バンパイアに行き良く地面に叩き込まれた

「ジーミー！！！！」ミキは大声で叫んだ

そこには血だらけのもとの姿のジーミの姿があった

「あつけないですね。まだこれからののに」

「テムー！！！！！！！！！！」

第四話 強敵その名はバンパイヤ（後書き）

いったいどうなるのか!!

第五話 敗北（前書き）

ソラVSバンパイヤ

第五話 敗北

「よくもーーーーー！！」ミキはバンパイア攻め入った

「やめろ！ミキ！！」ソラはミキに叫んだが聞いていなかった。

「バカですね、さっきの見て何も分かっていないですね。

意味がないと！！」大きく構えていた脚がミキの横腹部に命中し、大きく横に飛ばされ壁に直撃した

「ミキーーーー！！」

ミキも元の姿に戻って気を失っていた

「後は、二人ですね」

「ジミとミキをこんなにあっさりに、強すぎる」

あずさは、緊張のあまりに汗をかいていた。

「どうする、あずさ」ソラは、あずさに連絡した

「私がなんとか打っている内に攻め込んで！」

「分かった、やってみる」

「あんまりこれはやりたくないけど、やるしかない！」そして、あ

ずさの足元から大きな紋章が浮かび上がった。どうやら魔法陣だった。

あずさは、呪文を言った

「我が打つなり手、この身に言いなり、無限に打ちなりけ！！」

あずさのスナイパーの先から光が集められた

「いくよ、ソラ君！！」

「それは、ちよつと俺もヤバイ！」

「イッケーーーーー！！」

「インフィニットスナイパーシュート！！」

無限に打ちぬいたエネルギー弾がバンパイアに向かって打ち放った
そして大きな爆発が起こった

「あれならさすがのあいつでも・・・」と思い言ったその寸前

「あれがどうしたのですか」

あずさが驚き後ろを振り向いた。そこには、バンパイアの姿があった

「そんな・・・」

「なかなか面白かったですよ、だからゆっくりと眠りなさい!」

バンパイアが剣を取り出し、あずさに切り裂いた

「あずさー!!」

あずさは、血まみれとなり倒れた

「後は貴方だけですネ」

「みんな、そんな・・・」

「みなさんと同じく眠りなさい!!」

剣が黒く染まった

「ダークフィスナル」

その力の剣にソラは、地面に叩き込まれた。

「あつけない・・・」

バンパイアはその場から姿を消した・・・

第五話 敗北（後書き）

よろしく

第六話 また新しい敵（前書き）

ついにあの三人が！！

第六話　また新しい敵

「はっ！・・・」ソラが起きたのは、同じ病室だった

「そういえば皆は」ソラは、病室から出たら目の前にミキ達が入り口前にいた

ミキは腕に包帯が巻いていた。ジミまつば杖を使って、あずさは、傷口に包帯と点滴を打っていた

「ソラ大丈夫？」ミキが言った

「俺は大丈夫だけど俺より皆の方が・・・」

「僕たちなら大丈夫だよ！」と、ジミは、元気そうに言った

「とりやえず先生は、今日は休んで、二日後にはリハビリができそうだって」あずさが説明した

「なら今回は休ませてもらうか」

一方そのころ

「なぜ、あいつらを殺さなかったの！」メビューサが問いかけた

「すぐに殺したらつまらないでしょ」

「チッ！」メビューサが舌打ちをした

その時カプセルが一つ開いた中から一人の少年が出てきた

「よう！ギール」カオスがギールという少年に話しかけた

「体が少しなまっている」

「なら、少し面白い奴に合わせてやる」

「さっきのアイツかよ」

「君にもやってほしいことがあるんだよ」

「分かった、すぐ行く」と、ギールは姿を消した

「いいのですか？奴に行かせて」

カオスが後ろを向くとカプセルからまた二人が出てきた

「バーンとリーンもやってほしい事がある」

「まさかの早速のお仕事！」少女リーンが喜んでいた
「それじゃ、行ってくる」バーンが言うと二人も消えた

そして出来事は夜となる・・・

ソラの病室の外側の窓が開いていた。

そこにギールの姿があった

「森で待っている、必ず来い」

その寸前ソラが目覚めるとギールの姿は、いなかった

「何なんだ今さっきの声は・・・」

でもなぜかソラは病院を出て森に向かって走り出した

「行ったね」「ああ」

リーンとバーンは病院の屋上からソラが走り出すのを見ていた

「それじゃそろそろ、私達も」

二人は病院の中に入った

ソラは森を歩いていた

「こんな所まで呼ぶなんて」

「待っていたよ！」と、大声で言ったやつがいた。ギールだった

「誰だお前!!」

「俺の名はギール！お前を殺す名だ!!」

ギールは大きな大剣でソラに走り向かった

ソラはチェンジし、刀を取り出しギールの刀と交じり合った

「さあ！始めようか!!」 「クソーー！何なんだこいつは!!」

第六話 また新しい敵（後書き）

どうなる！？

第七話 さよなら（前書き）

遂に、あのミキ達まで!!

第七話 さよなら

「なんだ？そのていどか！」

ギールがソラに言った。

「くそっ！なんなんだあいつは、武器の刀はでかいし、変な形だけどそれを上手く使いこなしている。」

そして、かなり強い！」

ソラは、かなり苦戦していた。

「こんなんで、終わっては、困るんだよ！！」

ギールの刀が突然、光出した

「今度は、なんなんだよ！」

ギールの刀がソラの武器に似て長さは刀を振った瞬間刀は、伸びた。ソラは、それを何とか避けた。

「さあ、もっと楽しもうぜ、この「ザビマル」の餌食えじきになってな！！」

「メツチャサイヤクな奴だな」

「いくぜ！！！」

一方ミキ達は、ソラがいなくなったのを知り探していた。

「いた？」ミキがいい

「いないよ」と、ジーミが返事をした

「いったいどこに行ってしまったの？？」あずさが悩んでいた

「まだ動ける身体じゃないのに」ミキが落ち込んで言った

と、その時

「なにしているのかな？」

「！！」あずさが振り向いた

「誰！！」

二人も振り向く方向に二人がやってきた

「あの子なら帰ってこないよ」少女は答えた

「それは、どう言うこと？」ミキは、鋭い視線を向いた

「それは簡単なことだ、今はうちの奴がアイツとやり合っているからだ！」

少年は、強く言った。

あずさは、銃を取り出した瞬間、少女は、小さな魔方陣を開いたその時あずさは
気を失って倒れた

「あずさちゃん!!」

そして、ミキとジミも気を失い倒れた

「案外簡単だったね。バーン」

「連れていくぞリーン」

「アイよ!!」

「そろそろだな」

「なにがだ!!」

「もうすぐで俺たちは、最強の帝国が出来る!!」

「帝国だと・・・」

「そうさ！カオス様を始め我ら「九帝王」により、この世界は、カオス様の物となる」

「それと今になにが関係がある!!」

「九帝王のためにお前の友達を頂いた!!」

「ミキ達だと!!」

「そうだ！あいつ等はもうカオス様の部下となり俺らの仲間にもなる」

「このやろう!!」

ソラの刀は電撃を纏った

「サンダーブレイド!!!!!!」

「じゃあな」ギールは当たる前に姿を消した
ソラは元のすがたに戻った

「嘘だろ・・・嘘に決まっているよな!!」

第七話 さよなら（後書き）

どうなるのか!?

第八話 着いた場所は・・・（前書き）

ソラが飛ばされた所は！

第八話 着いた場所は・

ドン！！

「いてて・・・？」

「どこなんだ、ここは？」

ソラが起き上がった所は、どこかの家のベッドだった

「ここは、いったい・・・。」

ベッドから降りたとき目の前の扉が開いた。

「誰かいるの・・・って、あら！ユウタくんじゃない！今までどこに行っていたの？」

心配したんだよ、クラスのお友達も皆も」

ソラは何のことだかさっぱり分からなかった。

（クラス・・・？それに、ユウタ・・・？何のことかさっぱり分からん）

「あの・・・どちら様？」ソラは話かけたお姉さんに聞いた

「「どちら様」って、私だよ、近所のまりこでしょ！」

何寝ぼけた事を言っているのですか？？ 取り合えず早く着替えなさい！

学校に遅刻するよ」

まりこは、部屋を出て扉も閉めた

「いったいなんだよ、さっきの人は？」

ソラは腕を見て驚いた、それはトランサーが無くなっていた。

「なんでだよ！こんなときに・・・まっ取り合えず「着替えろ」って言われたし学校と言うところに

でも行っただけか」

ソラは近くのカバンを持って家を出た

ソラが見た光景はクローズワールドとは、違っていた。

「いったいここは、どこなんだろ・・・でもここ、見たことがあるような・・・？」

ソラが悩んでいたとき、ひとりの少女が彼に向かって走ってきた！
「ユウタくん！！今までどこに行っていたの？？」

「え・・・??」

「答えなさい！！！」

と、すると

「しおん、あんまりユウタに攻めたりするな、まだ見つけたのはユウタだけなんだから」

と、また一人の少年が来た。

「分かっているよ、かずしくん・・・でも！」

「どうしたのですか??」

又もや一人の少女やってきたときソラが驚いた眼をした

「君は・・・」

「あら？サキちゃんユウタくんとはお知り合い??」しおんはサキと言う少女に聞いた

「いいえ、初対面です」

「でもそっか！丁度彼と入れ違いだったね」

（入れ違い・・・?どういう事、まさかこの子）

「ヤバイ！！学校、遅刻しそう」かずしが慌てていた。

「それじゃ走るよ！！」と、同時に4人は、走り出した

4人は、何とか学校に間に合った

そしてときは流れ学校も終わり下校時間になり4人は帰りの途中だった

「それにしてもさすがユウタくん、休んでいたのに勉強の方は大丈夫だったね」

しおんは、ソラに言った　そして・・・

「なんでここに帰ってきたの・・・」

「えっ・・・?」それは、サキの声だった

「あなたここには、戻ってはいけないの・・・今のあなたは、この世界にいては、いけないのよ!!」

「何言っているの？サキちゃん」

「そうだよ!」しおんとかずしが言った

「やっぱり、そうだったのか・・・サキ、俺をクロースワールドに飛ばしたのは・・・」

きみだっ たんだな」

「あなたは、向こうにいるべきなの!後で公園で待っているから」サキは、一人で公園向かった

「ユウタくん・・・?あれは、いつたい」

「俺は、ユウタじゃない・・・」

「ええっ!!!」二人は、驚いた!

「確かに俺は、ここに居ては、いけなかったんだ!!」

ソラは、走り出した

「ちよつと!」

「僕たちは公園で見てみようよ」かずしは、言い、しおんはうなずき公園にいった

ソラは、家に着きカバンを置いたらベッドの上にトランサーが落ちていた

トランサーを付け出るとき

「ユウタくんどっか出かけるの?」まりこさんだった

「うん・・・しばらく帰ってこれない」

「ええ?」

そしてソラは、公園に向かい走り出した

「ユウタくん・・・」

ソラは、公園に着いた

「来たね」

「ああ」

「それじゃあ」サキは、手を広げ空間を作った
「いくか!」

「まって!!」

しおんにかずしがやってきた

「どうして来たんだよ!」

「決まっているジャン!!」

「僕たちも行くんだよ」

「そんなダメだ!!」

「あなた、記憶がないみたいだね」

「なんでそれを・・・」

「見ただけでわかった。だから記憶を取り戻すためにいくのよ!!」

「ソラだ・・・今の俺の名は、ソラだ」

「分かった行こう!!」

4人は、空間の中に入り消えた

第八話 着いた場所は・・・（後書き）

再びクロースワールドへ！！

第九話 最大の別れ・・・（前書き）

ついにミキ達は、カオスの前に！
ソラは、再びバンパイアとだが！！

第九話 最大の別れ・・

そこは、飛行船の中だった。

「おい！ここからだせつ！」ジミーの声だった　だが、ジミー達三人は、牢屋の中だった

「無駄よ・・どんなにやつてもここからは、出られない」ミキだったが、元氣のない声だった

「確かにな」　「！！」みんなが振り向いたら外から一人やってきた、ギールだった

「私達を、どうする気！」あずさが問い詰めた

「それは、俺にも知らん・・ソラだったかな、あいつの名」

「おいっ！ソラに何かやったんか！」

「いいや、あいつと一戦交じっただけだ、だけど」

「だけど？」ミキが聞いた

「あいつの振りは、本物じゃなかった」

「本物じゃない・・？」

「何か別のものを感じた・・・・・もうじきに着くおとなしくしといてくれ」

ギールは、部屋を出た

「なんだよ、本物じゃないって」

「だけど、よかった無事でこれで最後かもね」

「それ、本気で言っているの・・・・・これで最後って言いたいのに！」

「あずさちゃん・・・・・」

「着いたか、ここがクロースワールド」

「へっすごい地球よりきれいだね！！」

「環境も良いみたいだけど」

「人がいない・・・・・」

「確かに夜でも流石にひと気が無い」
「でもそれに、私達に付いているこれは、なに？」しおんは質問した
「それは、トランサーだよ」ソラは、説明した
「へートランサーか結構カッコいいじゃん！」かずしが言った
「どうするの？」
「マップで見てみたら森に方たくさんさんの反応がある」
「それじゃ行ってみようよ！」
4人は森の方へ走り出した

一方そのころ飛行船は、ある塔に着いたそこは、なんと奴らの本拠地だった

先頭にギール、リーン、バーンの3人後ろにミキたち3人は、先に続いて歩いた

「着たかギール、思ったより早かったな」

「おまえは！！」ジミはその声で反応した

「もうお知りだと思えますが我が名はカオスと申し上げます」

「お前らのせいで関係のない人たちまで」と、あずさが言った

「あなただけは、倒す！！」あずさは、ビーム銃と取り出したときは、カオスは、目の前にいた

「早い！！」「まあゝそんなに早まらなくても」

カオスは、あずさの銃を落とした

「そこ！！」一瞬の隙を見て間合いを攻めた

「意味が無い」「ダークネスブラス！！」

カオスのパンチが見事にミキの腹部に命中してミキは勢いに飛ばされた

「お姉ちゃん！！」

「私は大丈夫・・・」

「実は君たちにお願いがありません」

「お願い??」

「私に協力してもらいたい、それに強気力も手にすることもできる」
「力……」

「あいつの惑わせを聞いたらだめだ!!」ジミは、力強くいった
「まゝこれでもみて考えてください」

カオスは一つの映像を出した

「!!」3人は、驚いた。そこにはソラが映っていた。しかし、彼の姿はボロボロだった

ソラは3人を遠くに隠れさせて戦っていた

でも相手は、バンパイアと……町の住人たちだった!!

住民たちは、銃を構えソラに集中し狙っていた

「何とか防ぐのが限界かよ……」

「やばい、ユウタはもう限界がきている」しおんは、心配で見っていた
「どうしたのたね？」

ソラは、隙をみてバンパイアに攻めたが銃の弾が左肩をかすった
「うっ!!」

「もうヤメテ!!」

「協力しますか？」

「わかった……協力する」

「ミキ!!」 「お姉ちゃん!!」

「もういいのよ……これで」

「でわ、これからは、よろしく……連れていけ」

「ごめんね……ソラ　そして、さよなら」

「撤退だ」バンパイアと住人は姿を消した

ソラは、アーマーを解除し、その場を倒れた

「ユウタくん!!」 「ソラさん!!」

「取りや得ず病院だ、近くに別の町がある急ごう」

「ユウタくん!! しっかりして!!」

ソラは、完全に気を失っていた

「それじゃ、始めるか新たな時代へ!!」

「ユウタか・・・」

ギールは彼らの映像を見ていた

「まさかな・・・」

第九話 最大の別れ・（後書き）

この先どうなるのか!?

第十話 記憶（前書き）

ついに、ソラの記憶が!!

第十話 記憶

しおん達は、ソラを運び何とか病院に着いた。

「先生、後はお願いします」しおんは医者をお願いを言った

「わかりました」医者は答え医務室に入った

「後は待つだけか」かずしが言った

3人は、近くの椅子に座った

「あなたは知っていたの、ユウタが記憶を失い、戦っているのを」

しおんは、サキにいった

「戦っているのは、知っていますが、記憶に関しては・・・」

「なんでそんな事を彼にさせたの、ユウタは苦しんでいるのよ！

なのに！」

「彼は、それを望み今戦っています」サキは答えた

「なんでそんなにも簡単に言えるのよ。彼の気持ちも分かんないのに」

しおんは、涙を流していた

「しおん・・・」かずしは小さな声でいった。

そのタイミングに医務室からソラの姿があつた

「ユウタ！」しおんはソラに寄った

「ソラだ！」ソラはユウタの名に否定した

「取り合えずは2・3日入院して絶対安静に」医者がいった

「分かりました」ソラは答え病室に向かった

「かずしくん、果物でも、買いに行こう」

「わかった、サキはソラを見といて」

「分かりました」

「どうしたんだ？しおん・・・ソラの事かい？」

「彼は私達を守ってあんなことになってしまった。

私達は、ずっと守られ続けるの」

「それはもう絶対ダメだ。本当は、僕らが彼を守らないといけないんだ」

「そうね、そうだよね！」

二人が話している近くに大きな爆発が起こった

「あの少年の捕獲なんて、カオス様は、何を考えているのかしら？」

リーンが言った

「仕方ない命令だ、彼がこの町に居るのは情報済みだ」

バーンが言った

「行こう！かずしくん」

「ああ！」

「あら？あなた達は、彼と一緒にいた子だ。

ソラだったかなあの子は、今どこに居るの？

「ユウタくんは来ない、私たちが相手よ！」

「いくよ！」

二人のトランサーが光り出し姿が変わったでも今までのソラたちのアーマーが違っていた

しおんは肩に翼模様に輪を描いたような武器だった

「サンドロツクー！」

かずしは肩と脚にミサイルランチャーで右腕に腕ぐらいに長いバルカンが装備していた

「バルカー！！」

「なにコツら今までのやつと全然違うじゃない！」リーンは、驚いた声で言った

「なかなか面白い相手だな」バーン嬉がっていた

「やるよ、かずしくん」 「ああ！」

二人は、戦い始めた

ソラは、まだ頭に包帯巻いて傷口にカット版を張っていた

「俺も行かなくちゃ」

「ダメ！まだ安静しないといけなくて」

ソラはサキの肩に手を置いた

「俺は、守らないといけないんだ。この手で」

「それはあなたに死を求めているのと同じです」

「それでもいい、俺は死んでも守る！！だから」

「分かりました。参りましょう」

しおんはバーンと戦っていた

「なにこいつ力が大きい！」

「もう弱音を言うのか」

「うるさい！」

かずしはリーンと

「こいつはやい！」

「どうしたの？この程度なの」

「サンダーブレイド！！」

リーン横から振ってきた攻撃をよけた

「しおん、かずしふたりは、離れろ」

ソラのアーマーは、まだ直っていないくまだボロボロだった

「無理だよ、その姿は」

「俺は、みんなを守らんといけないんだ」

「それがこれか」

ソラの目も前にはバーンの姿があった

「バーニングパンチ！！」

その攻撃は命中しソラは近くのビルまで飛ばされた

「ユウタ！！」

「おまえはだれ一人助けられない！！」

ソラ一時気を失った

「！！・・・ここはどこ？俺はいつたい・・・」

ソラが見たのは辺りが真っ暗だった

「起きましたか」

ソラがみたのは光の塊だった

「あなたは??」

「あなたにこれを」

ソラに渡されたのは小さな光の塊だった

そしてソラの中に入った「!!・・・これは!!」

「何もかもあなた達に託します」

「待ってくれ!!」光は消えてしまった

ソラは気を戻した

「そうだよな、何にも変わらない奴がだれ一人救えないよな
だったらそんな自分を変えてみせる!!」

「やっど、思い出せた。何もかも」

「さっきのとは、まったくの別人だ。お前何者だ」

「俺の名前・・・決まっているじゃん!!」

もう「ソラ」じゃない・・・

俺の名はユウタだっ!!」

そしてかれの周りの雷から熱く燃える炎に変わった

武器も鋭くまっすぐな剣になった

アーマーも肩のところが横から斜め上に上がり左腕は、シールドが
付いた

「ファイヤー!!」

「さあ!始めるか、本当の戦いを!!」

第十話 記憶（後書き）

ついに！ユウタが復活！！

第十一話 新たな舞台で（前書き）

ここからは、ソラじゃなくユウタに戻った

第十一話 新たな舞台で

「ユウタ・・それがお前の名」バーンが聞いた

「そう、それが俺の名だ」

「ユウタ、やっと記憶が」しおんは彼を見て笑顔で返事をした

「でも、どうするの？雷属性だったのに本当は炎属性だなんて」リ
ーンは、慌てて言った

「今回は引き上げる、だが次は仕留める」

そして二人の姿は消えた。それを見てユウタ達は元の姿に戻った

ユウタは、しおん達に向いた

「なんて言えば良いのかな？その・・・

ただいま・・・しおんにかずし」

「まっいいか」かずしは言ったが

「ユウタ・・・！！」しおんは泣きつ面でユウタに抱きついた

「痛いって！まだ傷口が・・・！！！！」ユウタの悲鳴は町中
に響いた

「あれが本当の彼・・・」サキは三人の様子を見て言った

「まさかね・・・」リーンはため息を吐いていた

「仕方ない次は俺が行くまだつけていないからな」ギールはいった
「なら彼女を連れていけ」

カオスが言ったのはギールの近くにいたポニーテールをしていた少
女だった

「分かった、いくぞミラ」

「分かった・・」

ミラと言う少女は返事をして姿を消した

「バーン、あの子って・・・」

「ああ、あいつは俺達と同じだ」

「ホント勘弁してもらいたいよ」

「ゴメン、ゴメンついうれしくて力が」

「それで痛みはユウタ」

「今はだいぶ直った、誰かさんが痛めつかなければ、もっと良かったのに」

「だからゴメンって言っているでしょー!!」しおんは武器を取り出した

「待つて!!武器はダメ!ダメだつて!!!!」ユウタは慌てた

「うるさい!問答無用!!」

「だからダメだつて! うわわ~~~~~~~~!!!!!!!!!!」

ーそして夜にー

ユウタは汗だくで倒れていた

「今回で二回殺されそうだったし」

「とくに二回目の方がヤバかったな」かずしが答えた

「これからは、毎日が地獄だな」

「だつたら今からでも送ろうか?」

「!!..お前はギール!」

「久しぶりだなユウタ、今度こそ倒す」

「それは、こっちのセリフだあ!」

ユウタとかずしは武装形態に変わった

「俺はユウタをやる、ミラは他を」

「分かった」ミラが答えた

「また新しい奴か!!」

「増えたら厄介だな」

「かずしは奴を」

「分かっている」

二人は離れて戦った

「記憶の方は心配ないな」

「お前、俺が記憶喪失だったを知っていたのか」

「前の戦いでお前の筋が違っていた」

「たったそれだけでか、凄いなギール」

「話はここまでにして、始めるか」

「ああ!!」

「クソッ！木が邪魔で当たらない」

「どっちにしても当たらないけど」

ミラは縄の武器を出した

「縄？また変わった奴だな」「ゴメン！遅れて」しおんが駆けつけた

「まあいい！」

「ユウタは？」

「別のところで戦っている」

「揃ったみたいですね、それじゃ」

「来るよ！」「ああ！」

第十一話 新たな舞台で（後書き）

ユウタVSギール

かずし&しおんVSミラ

いったいどうなる！？

第十二話 解放！（前書き）

久しぶりの投稿だ！！

第十二話 解放！

森の方へ幾つか爆発が起こった

「駄目だ、いくら撃つても当たらない」

かずしが苦戦していた

「あの子の動きが速過ぎる」しおんも同じだった

「それが精一杯なの？あんまり面白くなかったよ」

ミラが答えた

「貴女、なんでユウタ君に襲ったの？前の二人組だって同じだった」
しおんが聞いた

「あなた達には、関係無い。只、用があるだけだ」

「それが何だかって聞いている！」

「・・・・・・・・」

三人とは、別で戦いが起こっていた

「腕をあげたな、お前」ギールが言った

「そいつはどうも」ユウタが答えた

「ファイヤーカット！」ユウタが炎を纏った剣を大きく振った
「だが！」

ギールの剣で切り散った

「所詮、俺には及ばない」

「確かにお前に勝つなんて難しい・・・・けど！

決してお前に勝てない道理は無い！！」

「威勢だけは達者だな」

「いくぞ！」

「お前が勝てるならな！！」

二人の間合いが縮まり剣が交り合った

「！！・・・ギール」

ミラは突然口に出し二人の前から姿を消した

「なんなの？ いったい？」

「あの方角は、まさかユウタを！」 かずしが閃いた
「速く行かないと」

二人もユウタの方へ行った

「やっぱりうまくいかないな」

ユウタはいくつもの技を出したがギールには、届かなかった

「まあ、あの時よりは上達はしてるな。」

呑み込むのが速いな」

「生まれ付きなんで」

「・・・！！」ユウタは後ろに殺気が感じた

ミラだった

「思ってたより速かったなミラ」

「貴方が心配で来てみたけどちょっとミスっている方ね」

「心配無しさ」

「やはり狙いは俺か」

「では、私から」ミラが構えた瞬間ユウタは、何か思い出そうとしていた

（あの構え方・・・どっかで見たことがある方な）

「くらえ！！」

「こいつ速い！！」ユウタはミラの攻撃避けた

（あの攻撃方に間合いの攻め方、もしかしてまさか）

「お前まさか・・・ミキなのか？」

「ミキ・・・誰の事

かし・・・ら・・・」

ミラは突然頭痛を起こした

「ミラ！！」

「ギール！！貴様ああああ！！！！！！！！」

ユウタの周りから大量の光がユウタを包んだ

「なんだあれは、」

かずし達も着いた

「何あれ？」

「解放！！ウイング！！」

その声とともにユウタの姿が変わった剣がもう一つ肩のアーマーの先に小型シールドが付き

背中に翼の方な大型ビームランチャーが付いた

「お前、二刀流使いか」

「お前だけは、許さない！！」 ユウタの右剣は雷、左剣は炎を纏った

「二つの属性」

「ツインドライブブレイド!!」

二つの属性を纏った剣を放った

「くっ……っは、撤退だ」

二人は攻撃が当たる前に姿を消した

「まさか、彼女がミキさん」しおんが茫然といった

ユウタは元の姿に戻ったが彼は、膝をついた

$$u_1, u_2, \dots, u_n, \dots, u_{\infty}$$

くそおおおおお！！！！！！！！！！」

第十二話 解放！（後書き）

次回予告

ミラの正体を知ってしまったユウタ

その結果ユウタ精神の迷いが生まれた

そして、彼達に前現れた人たちは・・・

次回「反乱軍」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7989r/>

ブレイズ クローズ

2011年12月2日16時51分発行